

線形計画問題

制約条件が 1 次の等式あるいは不等式で表されるときに, 1 次関数である目的関数を最大化 (あるいは最小化) する問題.

講義内容

LP1 線形計画問題による定式化の例

LP2 諸定義 (可能解, 最適解, 標準形, 基底解, 基底変数, 非基底変数, 基底可能解)

LP3 シンプレックス法

LP1 線形計画問題による定式化の例

[例 1]

- 3 種類の材料 1 ~ 3 から 2 種類の商品 1, 2 を作る.
- 商品 j を 1 単位作るのに, 材料 i が a_{ij} だけ必要 ($i = 1, 2, 3, j = 1, 2$).
- 材料 i の使用可能量は全部で b_i .
- 商品 j の 1 単位あたりの売り上げは c_j .
- 総売り上げを最大にしたい.

各商品 j を x_j 単位作るものとする ($j = 1, 2$).

$$x_1 \geq 0, x_2 \geq 0.$$

- 商品 j を 1 単位作るのに, 材料 i が a_{ij} 必要.
 $\Rightarrow x_j$ 単位作るのに, 材料 i が $a_{ij}x_j$ 必要.
- 材料 i の使用可能量は全部で b_i .
 \Rightarrow 商品 1, 2 のための使用量の和を考えると,
$$a_{i1}x_1 + a_{i2}x_2 \leq b_i. \quad (i = 1, 2, 3)$$
- 商品 j の 1 単位あたりの売り上げは c_j .
 \Rightarrow 総売り上げは $c_1x_1 + c_2x_2$.

結局, 以下の問題を解けばよいことになる.

$$a_{11}x_1 + a_{12}x_2 \leq b_1,$$

$$a_{21}x_1 + a_{22}x_2 \leq b_2,$$

$$a_{31}x_1 + a_{32}x_2 \leq b_3,$$

$$x_1 \geq 0, x_2 \geq 0$$

という制約条件のもとで, 目的関数

$$c_1x_1 + c_2x_2$$

を 最大 にするような x_1, x_2 を求めよ.

$$A = \begin{bmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{21} & a_{22} \\ a_{31} & a_{32} \end{bmatrix}, \quad x = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \end{bmatrix},$$
$$b = \begin{bmatrix} b_1 \\ b_2 \\ b_3 \end{bmatrix}, \quad c = \begin{bmatrix} c_1 \\ c_2 \end{bmatrix}$$

とおくと,

目的関数: $c^T x \rightarrow \text{最大}$

制約条件: $Ax \leq b, x \geq 0$

と書くことができる (T は転置を表す).

[例 2]

- 4 種類の食品 $F_1 \sim F_4$ から 3 種類の栄養素 $N_1 \sim N_3$ をとる.
- 1 単位の食品 F_j には, 栄養素 N_i が a_{ij} 含まれる ($i = 1, 2, 3, j = 1, 2, 3, 4$).
- 栄養素 N_i の最低必要量は b_i .
- 1 単位の食品 F_j の価格は c_j .
- 総費用を最小にして, 最低限必要な栄養素をとりたい.

各食品 F_j を x_j 単位買うものとする .

$$x_1 \geq 0, x_2 \geq 0, x_3 \geq 0, x_4 \geq 0.$$

- 1 単位の食品 F_j には , N_i が a_{ij} 含まれる .
 $\Rightarrow x_j$ 単位には , N_i が $a_{ij}x_j$ 含まれる .
- 栄養素 N_i の最低必要量は b_i .
 $\Rightarrow 4$ 種類の食品中の N_i の量を考えると ,
 $a_{i1}x_1 + a_{i2}x_2 + a_{i3}x_3 + a_{i4}x_4 \geq b_i$.
- 1 単位の食品 F_j の価格は c_j .
 \Rightarrow 総費用は $c_1x_1 + c_2x_2 + c_3x_3 + c_4x_4$.

以下の問題を解けばよいことになる .

$$a_{11}x_1 + a_{12}x_2 + a_{13}x_3 + a_{14}x_4 \geq b_1,$$

$$a_{21}x_1 + a_{22}x_2 + a_{23}x_3 + a_{24}x_4 \geq b_2,$$

$$a_{31}x_1 + a_{32}x_2 + a_{33}x_3 + a_{34}x_4 \geq b_3,$$

$$x_1 \geq 0, x_2 \geq 0, x_3 \geq 0, x_4 \geq 0$$

という制約条件のもとで , 目的関数

$$c_1x_1 + c_2x_2 + c_3x_3 + c_4x_4$$

を 最小 にするような x_1, x_2, x_3, x_4 を求めよ .

$$A = \begin{bmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} & a_{14} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} & a_{24} \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} & a_{34} \end{bmatrix}, \quad x = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{bmatrix},$$

$$b = \begin{bmatrix} b_1 \\ b_2 \\ b_3 \end{bmatrix}, \quad c = \begin{bmatrix} c_1 \\ c_2 \\ c_3 \\ c_4 \end{bmatrix}$$

とおくと ,

目的関数 : $c^T x \rightarrow$ 最小

制約条件 : $Ax \geq b, x \geq 0$

となる .

LP2 諸定義

LP2.1 可能解と最適解

- 実行可能解 , 可能解 (feasible solution) : 全ての制約条件を満たすベクトル
- 可能領域 (feasible region) : 可能解全体の集合
- 最適解 (optimum solution) : 最大化問題の場合 , 全ての可能解の中で目的関数の値を最大にするもの . 最小化問題の場合 , 全ての可能解の中で目的関数の値を最小にするもの .

[例 3]

制約条件

$$x_1 + 2x_2 \leq 14$$

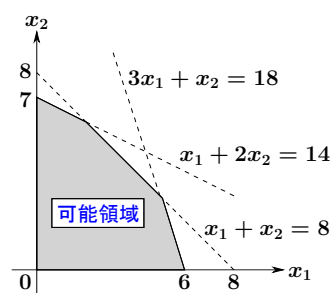
$$x_1 + x_2 \leq 8$$

$$3x_1 + x_2 \leq 18$$

$$x_1 \geq 0, x_2 \geq 0$$

目的関数

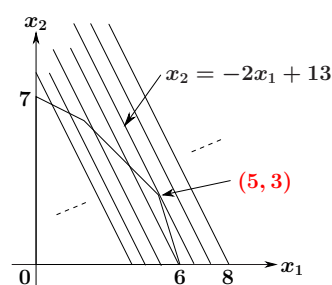
$$2x_1 + x_2 \rightarrow \text{最大}$$



$$K \triangleq 2x_1 + x_2 \text{ とおく } \Rightarrow x_2 = -2x_1 + K.$$

K の値をいろいろ変えて , 傾き -2 の直線を書き込むと , 可能領域を通るものの中で K の値が最大になるのは

$$x_2 = -2x_1 + 13.$$



この直線は , 可能領域内の点 $(5, 3)$ を通るので , 最適解は $(x_1, x_2) = (5, 3)$.

[例 4]

制約条件

$$x_1 + 2x_2 \geq 6$$

$$-x_1 + x_2 \geq -3$$

$$3x_1 + x_2 \geq 6$$

$$x_1 \geq 0, x_2 \geq 0$$

目的関数

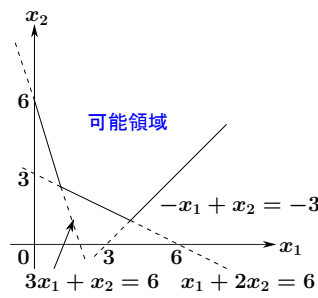
$$x_1 + x_2 \rightarrow \text{最小}$$

$$K \triangleq x_1 + x_2 \text{ とおく} \Rightarrow x_2 = -x_1 + K.$$

例 3 と同様に、傾き
-1 の直線を考える
と、可能領域を通る
ものの中で K の値が
最小になるのは

$$x_2 = -x_1 + 3.6.$$

この直線は、可能領
域内の点 (1.2, 2.4)
を通るので、最適解は $(x_1, x_2) = (1.2, 2.4)$.



LP2.2 標準形

以下の形式を標準形 (standard form) と呼ぶ .

$$\text{目的関数: } c^T x \rightarrow \text{最小}$$

$$\text{制約条件: } Ax = b, x \geq 0$$

x : 変数の n 次元ベクトル

A : $m \times n$ 定数行列

b : m 次元定数ベクトル

c : n 次元定数ベクトル

非標準形を標準形に直すことは容易にできる .

(1) 不等式制約条件がある場合

$$x_1 + 2x_2 \leq 14, \quad x_1 + x_2 \leq 8,$$

$$3x_1 + x_2 \leq 18, \quad x_1 \geq 0, x_2 \geq 0$$

\Downarrow

$$x_1 + 2x_2 + x_3 = 14, \quad x_1 + x_2 + x_4 = 8,$$

$$3x_1 + x_2 + x_5 = 18,$$

$$x_1 \geq 0, x_2 \geq 0, x_3 \geq 0, x_4 \geq 0, x_5 \geq 0$$

このような変数 x_3, x_4, x_5 のことをスラック
変数 (slack variable) と呼ぶ .

$$x_1 + 2x_2 \geq 6, \quad -x_1 + x_2 \geq -3,$$

$$3x_1 + x_2 \geq 6, \quad x_1 \geq 0, x_2 \geq 0$$

\Downarrow

$$x_1 + 2x_2 - x_3 = 6, \quad -x_1 + x_2 - x_4 = -3,$$

$$3x_1 + x_2 - x_5 = 6,$$

$$x_1 \geq 0, x_2 \geq 0, x_3 \geq 0, x_4 \geq 0, x_5 \geq 0$$

このような変数 x_3, x_4, x_5 のことを剰余変数
(surplus variable) と呼ぶ .

(2) 非負条件がない変数がある場合

そのような各変数 x_i に対して、二つの非負変
数 x'_i, x''_i を作り、 x_i を $x'_i - x''_i$ で置き換える .

(3) 最大化問題である場合

次の例のように、 $c^T x$ の最大化は $(-c)^T x$ の
最小化に変える .

$$2x_1 + x_2 \rightarrow \text{最大}$$

\Downarrow

$$-2x_1 - x_2 \rightarrow \text{最小}$$

[例 5] 例 3 の問題を標準形に直すと、以下のよう
になる .

$$\text{目的関数: } c^T x \rightarrow \text{最小}$$

$$\text{制約条件: } Ax = b, x \geq 0$$

ただし、

$$A = \begin{bmatrix} 1 & 2 & 1 & 0 & 0 \\ 1 & 1 & 0 & 1 & 0 \\ 3 & 1 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}, \quad x = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \\ x_5 \end{bmatrix},$$

$$b = \begin{bmatrix} 14 \\ 8 \\ 18 \end{bmatrix}, \quad c = \begin{bmatrix} -2 \\ -1 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix}$$

標準形に関して、次の二つの仮定をする。

- $n > m$. すなわち、変数の個数は、変数の非負条件以外の制約条件の個数より大きい。
- 制約条件の中に、他の条件式を組み合わせ得られるような冗長なものがない。

これ以降、上記の仮定を満たすような、標準形の線形計画問題について考える。

LP2.3 基底解、基底可能解

目的関数： $c^T x \rightarrow \text{最小}$

制約条件： $Ax = b, x \geq 0$

- ベクトル x の n 個の成分 x_j ($j = 1, 2, \dots, n$) を、 m 個と $n - m$ 個のグループに分け、それぞれのグループについて、成分を並べたベクトルを x_B, x_N と表す。
- そのグループ分けに対応して、 A を $m \times m$ 行列と $m \times (n - m)$ 行列に分けたものを、それぞれ、 B, N と表す。

[例6] 例5の問題における x の 5 ($= n$) 個の成分を、3 ($= m$) 個の成分 x_1, x_3, x_4 と 2 ($= n - m$) 個の成分 x_2, x_5 に分けたとすると、 x_B, x_N, B, N は以下ようになる。

$$x_B = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_3 \\ x_4 \end{bmatrix}, x_N = \begin{bmatrix} x_2 \\ x_5 \end{bmatrix},$$

$$B = \begin{bmatrix} 1 & 1 & 0 \\ 1 & 0 & 1 \\ 3 & 0 & 0 \end{bmatrix}, N = \begin{bmatrix} 2 & 0 \\ 1 & 0 \\ 1 & 1 \end{bmatrix}$$

$$\left(A = \begin{bmatrix} 1 & 2 & 1 & 0 & 0 \\ 1 & 1 & 0 & 1 & 0 \\ 3 & 1 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \right)$$

- 制約条件 $Ax = b$ は

$$Bx_B + Nx_N = b$$

と書き直すことができる。

$x_N = 0$ とおくと、 $Bx_B = b$. よって、このとき、 B が正則であれば、 x_B の値は一意に $x_B = B^{-1}b$ と定まる。

このようにして得られる特殊な解を基底解 (basic solution) と呼ぶ。

また、 x_B の各成分を基底変数 (basic variable)、 x_N の各成分を非基底変数 (nonbasic variable) という。

[例7] 例5の問題において、

$$x_N = \begin{bmatrix} x_2 \\ x_5 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \end{bmatrix}$$

とすると、

$$Bx_B = \begin{bmatrix} 1 & 1 & 0 \\ 1 & 0 & 1 \\ 3 & 0 & 0 \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} x_1 \\ x_3 \\ x_4 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 14 \\ 8 \\ 18 \end{bmatrix}$$

この方程式を解くと、 $x_1 = 6, x_3 = 8, x_4 = 2$. これに $x_2 = 0, x_5 = 0$ をあわせたものが一つの基底解をなす。

$$x_N = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_4 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \end{bmatrix}$$

とすると、

$$Bx_B = \begin{bmatrix} 2 & 1 & 0 \\ 1 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 1 \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} x_2 \\ x_3 \\ x_5 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 14 \\ 8 \\ 18 \end{bmatrix}$$

これを解くと、 $x_2 = 8, x_3 = -2, x_5 = 10$. よって、 $(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) = (0, 8, -2, 0, 10)$ は一つの基底解。ただし、これは可能解ではない。

- 一般に，可能解は無限に存在するが，基底解の個数は有限（高々 nC_m 個）．
- 基底解は可能解であるとは限らない．基底解のうち，可能解でもあるものを基底可能解（basic feasible solution）と呼ぶ．

次の定理が成立する（証明は省略）．

[定理] 線形計画問題が最適解をもつならば，基底可能解の中に最適解が存在する．

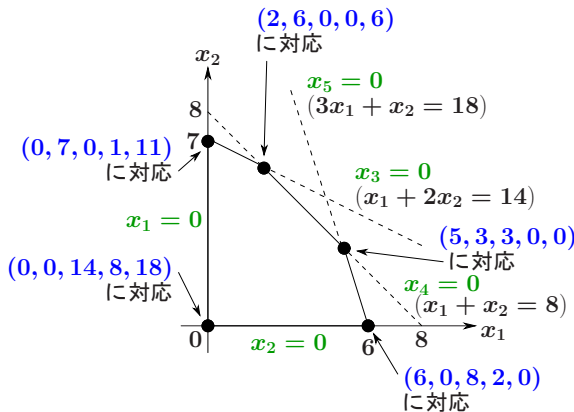
[例 8] 例 5 の問題の場合，以下のように，基底解は ${}_5C_3 = 10$ 個ある．

基底可能解（可能領域の頂点に対応）

$$(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) = (0, 0, 14, 8, 18), (0, 7, 0, 1, 11), (6, 0, 8, 2, 0), (2, 6, 0, 0, 6), (5, 3, 3, 0, 0)$$

可能解でない基底解

$$(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) = (0, 8, -2, 0, 10), (0, 18, -22, -10, 0), (14, 0, 0, -6, -24), (8, 0, 6, 0, -6), (22/5, 24/5, 0, -6/5, 0)$$



LP3 シンプレックス法

標準形の線形計画問題の最適解をシンプレックス法（simplex method）により求める手順について，例 5 の問題を例として用いながら説明していく．

[シンプレックス法の概略]

Step.1： 基底可能解の一つを見つける．

Step.2： この基底可能解が最適解かどうかの判定を行う．最適解であれば終了．

Step.3： より良い基底可能解を求め，Step.2 へ行く．

Step.1 最初の基底可能解を見つける．

- 一般の問題に対する方法は必ずしも自明なものではないが，ここでは省略する．
- （変数の非負条件以外の）各制約条件がスラック変数を含んでいる場合などには，このステップは簡単に実行することができる．

[例 9] 例 5 で述べた問題は以下のとおり．

制約条件

$$x_1 + 2x_2 + x_3 = 14$$

$$x_1 + x_2 + x_4 = 8$$

$$3x_1 + x_2 + x_5 = 18$$

$$x_1 \geq 0, x_2 \geq 0, x_3 \geq 0, x_4 \geq 0, x_5 \geq 0$$

目的関数： $-2x_1 - x_2 \rightarrow \text{最小}$

この場合， $(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) = (0, 0, 14, 8, 18)$ は基底可能解である．

この基底可能解に対し， x_B, x_N, B, N は以下のようなになる．

$$x_B = \begin{bmatrix} x_3 \\ x_4 \\ x_5 \end{bmatrix}, x_N = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \end{bmatrix},$$

$$B = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}, N = \begin{bmatrix} 1 & 2 \\ 1 & 1 \\ 3 & 1 \end{bmatrix}$$

Step.2 基底可能解の最適性の判定

$$Bx_B + Nx_N = b$$

であるので,

$$x_B = B^{-1}b - B^{-1}Nx_N$$

である(基底変数を非基底変数の関数として表している). これにより, 目的関数を, 非基底変数のみの関数として表す ことができる.

x の (x_B と x_N への) 分割に対応して, 目的関数の係数ベクトル c も, c_B と c_N に分割する.

$$\begin{aligned} c^T x &= c_B^T x_B + c_N^T x_N \\ &= c_B^T B^{-1}b + (c_N^T - c_B^T B^{-1}N)x_N \\ &= z_0 + \sum_{j \in NS} (c_j - z_j)x_j \end{aligned}$$

ただし, ここで

$z_0 = c_B^T B^{-1}b$: 現在の基底可能解に対する目的関数値,

NS : 非基底変数の添字の集合,

$z_j = c_B^T B^{-1}a_j$ (a_j は行列 A の第 j 列ベクトル).

$$\begin{array}{c} \begin{array}{c} c_B^T B^{-1} \\ \boxed{} \\ 1 \times m \end{array} \cdot \begin{array}{c} N \\ \left[\begin{array}{c} a_{j_1} \\ a_{j_2} \end{array} \right] \\ m \times (n-m) \end{array} \end{array}$$

$$c^T x = z_0 + \sum_{j \in NS} (c_j - z_j)x_j$$

各 $j \in NS$ について, $c_j - z_j$ は, 非基底変数 x_j の変化に対する目的関数の変化率を示す.

すべての $j \in NS$ について $c_j - z_j \geq 0$ であるとき, 任意の可能解を x' , その目的関数値を z' とすると,

$$z' = z_0 + \sum_{j \in NS} (c_j - z_j)x_j \geq z_0.$$

よって, 現在の基底可能解は最適解である.

Step.3 解の改良

$c_j - z_j < 0$ であるような値 $j \in NS$ が存在するとき, それらのうち, $c_j - z_j$ が最小となるものを一つ選んで p とする.

x_p 以外の非基底変数の値を 0 のままにしておいて, x_p の値を 0 から $\Delta (\geq 0)$ に増加させることにより, 目的関数の値を

$$(z_p - c_p)\Delta$$

だけ減少させ得る. Δ の値は, 可能解でなくなる範囲で, 最大になるように決める.

(これにより, x_p は基底変数に変わり, 他のある変数が非基底変数に加わる.)

Step.2 に戻る.

(例 9 の続き)

Step.2 (1 回目)

例 5 で述べた問題と基底可能解 $(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) = (0, 0, 14, 8, 18)$ に対して, 目的関数 z は

$$z = -2x_1 - x_2 \quad (1)$$

(この場合 $z_0 = 0$). x_1, x_2 のいずれの係数も負であるから, 最適解ではない.

Step.3 (1 回目)

$p = 1$ とする (p_1 を基底変数に変えていく). 基底変数 x_3, x_4, x_5 を非基底変数 x_1, x_2 で表すと,

$$x_3 = 14 - x_1 - 2x_2, \quad (2)$$

$$x_4 = 8 - x_1 - x_2, \quad (3)$$

$$x_5 = 18 - 3x_1 - x_2 \quad (4)$$

となる. よって, $x_2 = 0$ としたまま, $x_1 (= x_p)$ の値を $\Delta (> 0)$ まで増加させると,

$$x_3 = 14 - \Delta, x_4 = 8 - \Delta, x_5 = 18 - 3\Delta$$

となる.

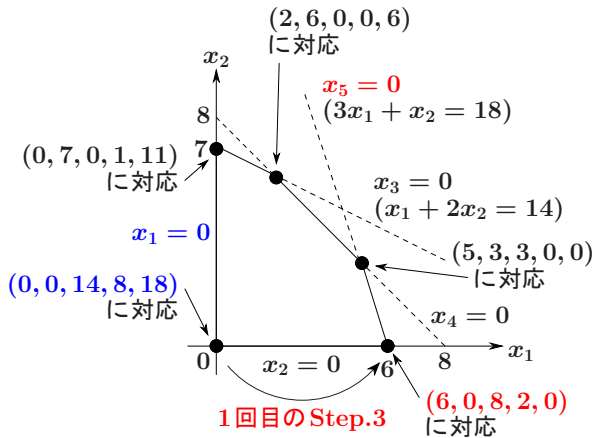
$x_3 \geq 0, x_4 \geq 0, x_5 \geq 0$ である範囲で Δ の値を最大にするので,

$$\Delta = 6.$$

これにより、新しい基底可能解

$$(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) = (6, 0, 8, 2, 0)$$

が得られる。このときの目的関数値は -12 。 x_1 が基底変数に加わり、 x_5 が非基底変数に変わっている。



Step.2 (2 回目)

式 (4) を変形して

$$x_1 = 6 - \frac{1}{3}x_2 - \frac{1}{3}x_5 \quad (5)$$

を得る。これを式 (1) に代入すると、

$$z = -12 - \frac{1}{3}x_2 + \frac{2}{3}x_5 \quad (6)$$

となる。 x_2 の係数が負であるから、最適解ではない。

Step.3 (2 回目)

$p = 2$ とする。式 (5) を式 (2), (3) の右辺に代入し、整理すれば

$$x_3 = 8 - \frac{5}{3}x_2 + \frac{1}{3}x_5 \quad (7)$$

$$x_4 = 2 - \frac{2}{3}x_2 + \frac{1}{3}x_5 \quad (8)$$

となる。式 (5), (7), (8) において、 $x_2 = \Delta$, $x_5 = 0$ とすると、

$$x_1 = 6 - \frac{1}{3}\Delta, \quad x_3 = 8 - \frac{5}{3}\Delta, \quad x_4 = 2 - \frac{2}{3}\Delta$$

となる。

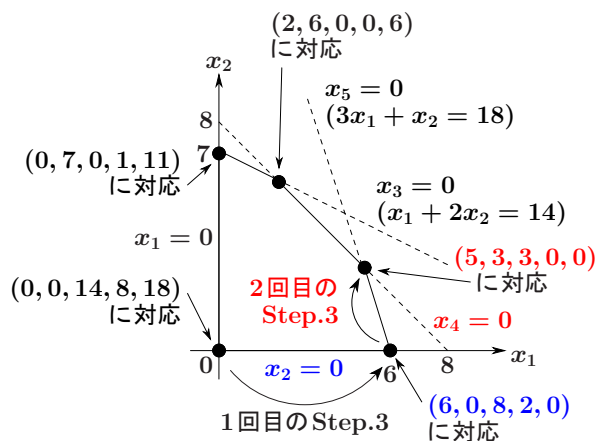
$x_1 \geq 0$, $x_3 \geq 0$, $x_4 \geq 0$ である範囲で Δ の値を最大にするので、

$$\Delta = 3.$$

これにより、新しい基底可能解

$$(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) = (5, 3, 3, 0, 0)$$

が得られる。このときの目的関数値は -13 。 x_2 が基底変数に加わり、 x_4 が非基底変数に変わっている。



Step.2 (3 回目)

式 (8) を変形して

$$x_2 = 3 - \frac{3}{2}x_4 + \frac{1}{2}x_5 \quad (9)$$

を得る。これを式 (6) に代入すると、

$$z = -13 + \frac{1}{2}x_4 + \frac{1}{2}x_5 \quad (10)$$

となる。 x_4, x_5 のいずれの係数も非負であるから、

$$(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) = (5, 3, 3, 0, 0)$$

は最適解である。終了。